《調査研究事業》

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業

二〇二三年度調査概要

はじめに

世界遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究は、福岡県・宗像市・福津市・宗像大社からなる「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会によって進められている。

以下、令和五年度に本遺産群に関連して行われた各調査研究の概要を以下に報告する。

一　特別調査研究事業

世界遺産に登録された際の勧告にもとづき、本遺産群に関わる古代東アジアにおける航海や交流、祭祀・信仰をテーマとした調査研究を二〇一八年より二〇二二年度までの五年間行った。今年度は、その成果を国内外に広く共有することに重点を置いて活動を行った。

国内向けには、二〇二三年三月に行われた成果報告会の講演動画を編集し公式ホームページで公開を行った。また、二〇二四年二月には、成果報告会での講演を元にした一般書『世界遺産　宗像・沖ノ島―みえてきた「神宿る島」の実像―』が吉川弘文館より発刊された。

国外向けには、英語版の特設ホームページを開設し、広く周知するとともに、そのURLを掲載した付箋を国外で開催された国際会議にて配布して広報を行った。二〇二二年九月に、オーストラリア、シドニーで開始されたイコモス第二十一回総会およびサウジアラビア、リヤドで開催された第四十五回世界遺産委員会のサイドイベントである五回世界遺産サイト・マネージャーフォーラムで広報活動を行った。

さらに成果報告書の概要を翻訳し、出版を行う。英語版の成果報告書は関係者に配布するとともに、公式ホームページで公開する。

令和六年度以降は、これまでの成果を元に残された課題についてさらなる検討を進めるための新たな特別研究事業への着手を予定している。

（福岡県九州国立博物館・世界遺産室・岡寺未幾）

二　宗像大社にかかる調査研究

（一）考古資料

考古資料の調査・整理作業は昨年から引き続き、宗像大社・宗像市文化財課を中心として、福岡県文化財保護課、同世界遺産室、同九州歴史資料館、宗像市世界遺産課で行っている。

ア．沖ノ島祭祀遺跡出土の奉献品の保存管理

宗像大社が事業主体となり「国宝宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品保存修理事業」を実施した。本事業は、平成二七年度からⅢ期一〇年計画で進めており、本年度はⅢ期三年目にあたる。四号遺跡ほか経年劣化の著しい二四品目（計一五八点）の保存修理、保存台図面作成を実施した。

また、令和四年度から宗像大社が事業主体となって進めている「国宝福岡県宗像大社沖津宮出土品ならびに国宝伝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品保存活用計画」は、策定が終了した。計画期間は文化庁の認定を受けた日から一一年後の三月三十一日までとしている。

（宗像市世界遺産課・白木英敏）

イ．国宝管理台帳

国宝沖ノ島出土品の管理台帳については更新作業を継続している。国宝管理台帳の基本台帳・土器台帳・貸出履歴・保存処理履歴について確認・更新作業を行っている。

ウ．土器詳細遺物台帳の作成

二〇一七年度より、報告書に基づく土器詳細遺物台帳の作成作業を九州大学考古学研究室と行っている。本年度の作業は、二〇二三年七月二十二日から二〇二四年三月下旬までに計一二回実施した。

二〇二二年度末、沖ノ島祭祀遺跡調査報告書と照合できなかった土器・土製品資料（以下、「未照合品」と表す）すべてについて台帳化作業が終了し、作成資料の内容見直しを行ったところ、報告書と照合できた土器・土製品資料（以下、「照合品」と表す）と未照合品の重複が判明したため、これまで作成してきた一覧表・台帳カード・個体カードの内容見直しを実施した。

二〇二三年度も、引き続き、一連の台帳化作業を終えた照合品二一一点と未照合品一六一点について、一覧表・個体カードの内容見直し作業を行った（二〇二四年一月現在）。台帳カードは修正が必要な部分が多いため、一覧表を確実に修正した後、見直すことにした。本作業では、照合品と未照合品の重複、誤って未照合品とされた照合品の抽出、作成資料の記入ミス、表記の不統一など新たな課題を確認し、修正や調整を行った。また、照合品に未作成台帳カードがあることも判明した。

二〇二四年三月、関係者で協議し、今年度作業の進捗と来年度の作業内容を確認した。

（宗像大社文化局　福嶋真貴子）

エ．沖ノ島祭祀遺跡に関連する写真・図面資料

沖ノ島祭祀遺跡の学術調査にかかる写真および図面など記録類については、二〇二〇年からデジタル化作業を進めてきた。本年度は、これまでデ

ジタル化されたデータの整理作業を行なった。

（二）文献資料

二〇一七年度から継続して「宗像清文氏奉納文書」のうち書簡・公文書などの一紙ものの目録作成作業を行っている。昨年度まで新型コロナウイルス感染症の影響などにより作業の実施が難しい状況にあったが、今年度は四月から十二月までに五回の作業が実施され、年度中にあと三回実施の予定である。

作業は宗像大社文化局に加え、九州国立博物館（福岡県立アジア文化交流センター）、九州歴史資料館が協力して行い、成果は新修宗像市史編纂室とも共有している。作業は来年度も継続して行う予定である。

（宗像大社文化局・津江聡実）

（三）経過観察

ア．「宗像神社境内」全体に関する調査

宗像大社沖津宮である沖ノ島、小屋島、御門柱、天狗岩の構成資産については、周辺海域を含めた釣人などのモニタリング調査を十回（一月八日（日）・三月十九日（日）・四月二十八日（金）・五月二十七日（土）・六月十七日（土）・八月五日（土）・九月十六日（土）・十月二十二日（日）・十一月二十二日（日）・十二月二十四日（日））に実施した。その内、十月二十二日（日）と十一月二十二日（日）には各祭祀遺跡の詳細なモニタリング調査を実施した。また、四月十二日（水）から十三日（木）には、カンムリウミスズメの営巣調査に同行し、小屋島の植生や新たに登記された岩礁確認、釣人が与える影響などを確認した。

中津宮では、十一月二十五日（土）に実施した「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会と宗像市世界遺産市民の会（以下、市民の会）が主催する資産周辺（沖津宮遙拝所周辺の海岸・かんす海水浴場・御嶽山展望台）の清掃活動に合わせ御嶽山祭祀遺跡等のモニタリング調査を行った。

辺津宮では、十月四日（水）に市民の会とともに資産の見回り活動を実施、十二月十三日（水）には下高宮祭祀遺跡のモニタリング調査を行った。現地調査関係者は以下の通りである。

宗像市世界遺産課　合島賢二　伊豆剛　岡崇　花田雄二　向井浩太

総務課　徳永淳

秘書政策課　一番ヶ瀬拓也

福岡県九州国立博物館・世界遺産室　正田実知彦

イ．宗像大社沖津宮の調査

沖ノ島の調査

九号遺跡、一〇号遺跡、一〇号東側遺跡における遺物の出土状況について重点的にモニタリング調査を実施した。また、専門家会議において出土遺物の取り扱い方針を定めた上で、宗像大社の承諾を得て金銅製品などの保護措置を行った。

今年の調査では、一月から三月にかけてオオミズナギドリが沖ノ島に戻ってきて巣穴を再掘削する時と十月から十一月の巣立ちの時期を迎えるころに遺物の露出が顕著になることが明らかとなった。

ＮＴＴドコモによる配線工事が祭祀遺跡より上方部分の一ノ岳までの区間で実施された。

また、昨年の台風で倒壊したみそぎ場の小屋は、十一月九日（木）に実施された氏子青年会による奉仕活動によって撤去された。

鳥居上の巨岩対策については、九月十六日（土）に福岡農林事務所が現地調査を実施し、今後の対応策を検討した。その結果、人為的な撤去は行わないとの判断に至った。

小屋島の調査

小屋島の調査では、数羽のカンムリウミスズメの営巣が確認された。植生は、低木層のシャリンバイ・トベラ・ハマヒサカキ・マサキと低層草本のオニヤブソテツ・ニオウヤブマオ・ボタンボウフウ・ホソバワダン・テリハノイバラ・ハマボッス・ダルマギク・ヒゲスゲの生育が確認された。また、新たに登記された宗像市大島字小屋島三〇〇〇番地・三〇〇一番地・三〇〇二番地・三〇〇三番地・三〇〇四番地・三〇〇五番地・三〇〇六番地・三〇〇七番地・三〇〇八番地・三〇〇九番地・三〇一〇番地の撮影を行った。さらに、岩礁に散らばった撒き餌の状況や鉄杭の打ち込み、石鯛釣用と思われるネジの複数の差し込み痕など通常のモニタリングでは観察できない改善すべき状況が確認できた。

御門柱の調査

上陸はせず、船内からの目視で確認。大きな変化はない。

天狗岩の調査

上陸はせず、船内からの目視で確認。大きな変化はない。

沖津宮遙拝所の調査

十一月二十五日（土）に「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会と宗像市世界遺産市民の会との共同主催の清掃活動を実施した。二トントラック三台分の漂着ゴミを回収した。

ウ．宗像大社中津宮の調査

十一月二十五日（土）に御嶽山祭祀遺跡のモニタリング調査を実施した。昨年同様、御嶽山山頂から南側斜面にかけて土器の散布が認められた。

エ．宗像大社辺津宮の調査

十二月十三日（水）に下高宮祭祀遺跡のモニタリングを実施した。高宮祭場の南側、上高宮のある宗像山の裾鞍部より、須恵器甕片の散布が確認できた。昨年から大きな変化はない。

その他境内における特記事項については以下の通りである。

・高宮祭場の参道の一部が地下遺構に影響のない範囲で整備された。

・高宮祭場の木柵が改修された。
・ご神木「カシワナラ」が害虫による被害を受け枯死。後継樹を植栽。
・高宮祭場入り口のスギとモミノキに落雷、その後伐採した。

オ．その他の調査

釣人調査

世界遺産委員会決議の追加的勧告「無断の来訪およびクルーズ船の増加による潜在的な脅威に十分配慮すること」に対応するため、沖ノ島及び周辺岩礁を海岸線で登記し、資産面積の変更についてユネスコに報告した。

現在、沖ノ島周辺岩礁は磯釣り客が利用しているが、今後上陸禁止を含めた利用制限を検討する必要がある。

今年も、沖ノ島とその周辺の防波堤や岩礁、小屋島、御門柱、天狗岩に上陸している釣人の人数調査を、一月～十二月の間に十回実施した。釣人調査を開始してから五年以上が経過するが一向に釣人の数が減少しない。

沖ノ島視認調査

沖ノ島への眺望が世界遺産の価値の一つでもあることから、大島の北、大島砲台近くのトイレ壁に設置したカメラから沖ノ島の視認調査を二〇一八年六月から開始した。

令和五（二〇二三）年は、全体の傾向として、一月以降視認度が低下し、四月から六月にかけて低い状態が続き、七月以降視認状態が回復、十月には視認度合いがピークとなり、その後徐々に低下することが確認できた。

この傾向は、昨年とほぼ同様であり、年間を通して平均すると沖ノ島は、大島から約五十％の割合で見えていることになる。ただし、大島から沖ノ島の岩肌までがくっきり見える割合は、下半期（八月から十二月）に比較的高いことから、沖ノ島を視認する季節としては秋から冬にかけてがベストということになる。

なお、令和五年二月十五日（水）から三月六日（月）までの二十日間は、カメラなどの故障により観測できなかったため、二月と三月のグラフはやデータ不足の状態で表示されているが全体の傾向として大きな差異はないと思われる。

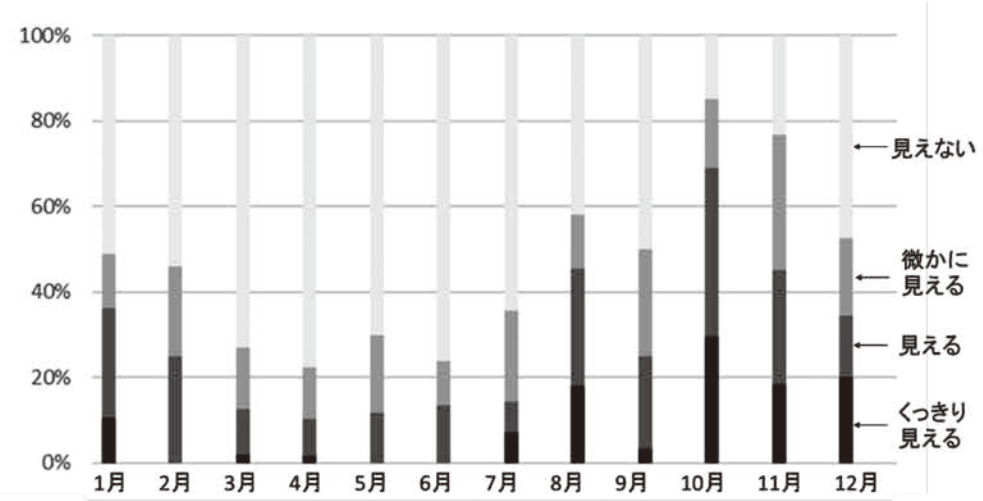
（宗像市世界遺産課　岡崇・
福岡県九州国立博物館・世界遺産室　正田実智彦）

三　新原・奴山古墳群の調査

三四号墳は、六世紀中頃～後半に築造された円墳で、現存する墳丘の直径は約十九m、高さは約六mである。墳丘周囲は開墾により平坦に削平されている。墳丘中央部には幅三m長さ六m程度の陥没があり、石室の南壁天井石付近に達している。これまでに発掘調査は行われておらず、築造当時の規模や周溝の有無等は不明である。二〇二一年度、墳丘西側崩落面の調査を行い、墳丘盛土と墓道を確認した。二〇二二年度は古墳の規模・形状を確認するため、墳丘周囲のトレンチ調査を行った。二〇二三年度調査では、石室内の流入土砂の除去及び三次元計測を行った（写真）。複室構

回数	調査日	調査箇所						合計
		小屋島	御門柱	天狗岩	沖ノ島	沖防	テトラ	
52	1月8日（日）	0	0	0	0	0	0	0
53	3月19日（日）	25	1	3	42	6	0	77
54	4月28日（金）	0	0	0	0	0	0	0
55	5月27日（土）	14	3	4	26	13	0	60
56	6月17日（土）	16	5	7	29	19	0	76
57	8月5日（土）	0	0	0	0	0	0	0
58	9月16日（土）	0	0	0	0	0	0	0
59	10月22日（日）	19	3	6	6	8	0	42
60	11月22日（日）	9	2	2	13	4	2	32
61	12月24日（日）	6	3	2	6	2	0	19

図一　沖ノ島釣人調査



1年間の内　くっきり見える10%　見える19%　微かに見える18%　見えない53%

図二　二〇二三年沖ノ島視認調査結果

写真一　新原・奴山古墳群三四号墳石室（前壁側から）

造であることを確認した。また、墳丘北側平坦面の表土除去及び遺構検出を進めている。三四号墳の調査は令和六年度に継続して実施予定である。

また、二基の円墳と考えられていた一五号墳と一九号墳については、二〇一八年度の確認調査によって一基の前方後円墳である可能性が想定されており、二〇二〇年度は追加のトレンチ調査を実施した。二〇二二年度調査では、一五号墳と一九号墳の境付近においてトレンチ調査を実施した。一五号墳から一九号墳にかけて連続する土層を確認した。また、一九号墳の墳頂部陥没の腐植土及び流入土砂を除去し、小型の石室を確認した。二〇二三年度調査では、一九号墳の墳丘土層の調査を行った。調査は令和六年三月に終了予定である。

このほか、航空レーザー測量の結果発見された古墳状の地形について確認調査を進めている。トレンチ調査の結果、新たに二基の古墳を確認した。古墳分布確認調査は令和六年度に継続して実施する予定である。

（永島聡士・福津市文化財課）

四　その他

（一）宗像市管内遺跡調査

本年度の埋蔵文化財事前審査において発掘調査に至った事例はなかった。文化財調査報告書作成については、令和二・三年度に度現地調査、令和四年度に遺物整理を実施した古墳時代前期末から後期にかけて営まれた集落遺跡、光岡六助遺跡（五・六次調査）と宗像大社辺津宮に所在する古墳時代中期の円墳、上高宮古墳出土品の報告書刊行を行った（註）。

（註）池田拓編二〇二四『光岡六助』宗像市文化財調査報告書第八四集
太田智編二〇二四『上高宮古墳』宗像市文化財調査報告書第八五集

（二）新修宗像市史編纂事業

本年度は、新修宗像市史（全六巻）の第五巻『祈りとまつり』・最終巻第六巻『くらしと生業』の編さん及び刊行を行った。本事業は、宗像市・玄海町・大島村の合併記念事業の一環として平成二十六（二〇一四）年度から始まり、最終的に十年を要し本年度で終了した。今後の新修市史編さん成果の公開・活用については、これまで編さん業務を担ってきた協働委託先の新修宗像市史編集委員会から世界遺産課文化財係が引継ぎ、実施することとなる。

（白木英敏）

（三）史跡宗像神社境内摂末社修理事業

宗像大社辺津宮本殿・拝殿の周囲に配置された二二棟の摂末社の保存修理を令和二年から六年計画で行っており、四年目の本年度は四棟の保存修理を行った。なお、今後二年間で八棟の修理事業を予定している。

（四）福津市管内遺跡調査

今年度は五件の埋蔵文化財発掘調査を実施した。調査の概要は、手光立花木遺跡（縄文～弥生、古代・集落）、花見遺跡（縄文～古墳・集落）、在自西ノ後遺跡第七次（中世～近世初頭・集落）、宮司浜ノ久保遺跡第三地点（近世・集落）、津屋崎山川遺跡（弥生～古墳・集落）である。

（松永通明・福津市文化財課）

（五）デジタル・アーカイブに関わる調査

二〇一九年度年より本遺産群に関わる文化財のデジタル化およびその公開を推進する事業を継続している。

今年度は国外向け解説映像作成の一環として、宗像大社の祭事およびそれに関わる地域住民と沖ノ島祭祀遺跡学術調査関係者およびの聞き取りを以下の通り行っている。

第一回　古式祭撮影・聞取調査

日時：令和五年十二月十六・十七日（土・日）

場所：宗像大社辺津宮

第二回　丸山八幡宮祭・大島住民聞き取り調査

日時：令和六年一月二十一日（日）

場所：つわせ・大島交流館

第三回　宗像大社・小田富士雄氏聞取調査

日時：令和六年一月二十九日（月）

場所：宗像大社・九州国立博物館

第四回　西谷　正氏聞取調査

日時：令和六年二月十五日（木）

場所：海の道むなかた館

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群　デジタルアーカイブウェブサイト　ＭＵＮＡＫＡＴＡ　ＡＲＣＨＩＶＥＳのデータベースの充実を図るため、沖ノ島祭祀遺跡に関連するデジタル化については、宗像大社に関わる調査研究（一）考古資料を参照いただきたい。

宗像大社関連古文書・史料データベースについて、宗像大社文書第四巻全巻の文字データベースの公開を行なった。

またコンテンツの多言語対応を進めるため解説動画の中国語・韓国語翻訳などを実施した。今後もさらなる充実を図っていく。

（六）公開講座について

令和元年（二〇一九）度から「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群公開講座を行なっている。

今年度は、今後の本遺産群の保存管理の向上を目的として、本遺産群の保存管理関係者向けの研修を行なった。

令和四年七月にＩＣＯＭＯＳ、ＩＣＣＲＯＭ、ＩＵＣＮ、ユネスコ世界遺産センターより出版された「世界遺産の文脈における影響評価のためのガイダンスとツールキット」を理解することを本研修の目的とした。

内容は、令和五年三月十三から十五日までに開催された「世界遺産の文脈における影響評価オンライン研修（ＩＡＷＨ23）」（ＩＣＣＲＯＭ、ＩＵＣＮ、ノルウェー気候・環境省主催）での研修内容をもとに、オフライン・オンラインのハイブリッド方式で研修を行なった。

本研修は主に本遺産群の関係者を対象とし、世界遺産部局だけでなく、構成資産に関わる文化財部局と緩衝地帯に関わる景観部局を含む本遺産群の関係者が出席した。あわせて他県の世界文化遺産関係者にも広くオンライン配信で公開し、オブザーバーとして多数の参加があった。

（七）イコモス第二十一回総会（ＩＣＯＭＯＳ ＧＡ ２０２３）への参加

本会議は、令和五年八月三十一日（木）から九月九日（土）までオーストラリア・シドニーで開催された。このうち学術シンポジウムが行われた九月一日から九月八日まで参加を行った。

本来は令和二年に開催が予定されていたが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行のため延期を余儀なくされたものである。三年越しで実施された本会議には世界中から三〇〇名を超える文化遺産に関わる専門家が集まった。「Heritage Changes（遺産が変える）」であり、二〇二〇年代に起きている激動の変化を検証し、遺産のあり方を考えることを目的として、①レジリエンス②責任③権利④関係性⑤Culture-Nature Journeyの五つのテーマで学術シンポジウムが行われた。うち⑤において「Nurturing Innovative Alliances for Conservation: Diversity as a Strategy（保全のための革新的な提携の育成：戦略としての多様性）」の共同発表を行った。

岡寺未幾（日本）福岡県庁＊（＊は現地参加）
Sanjeev Shankar（インド）Meghalaya Basin Management Agency ＊
Hok Nang Alex Tam（香港）Arthas ＊
Fatiha Babuly（バングラディッシュ）イコモス・バングラディッシュ＊
Fridah Joyce Chipoya（ザンビア）世界遺産ヴィクトリア・フォール
Nirupa Priyadarshani（スリランカ）スリランカ考古省

（八）第五回世界遺産サイト・マネージャーフォーラム（ＷＨＳＭＦ23）

世界遺産の保存管理に関わるサイト・マネージャーの国際的な知識と経験の共有とネットワーキングを目的として行われる本フォーラムは、第四十五回世界遺産委員会のサイド・イベントとして、サウジアラビア王国、ユネスコ世界遺産センター、ＩＣＣＲＯＭ（文化財保存修復研究国際センター）、ＩＵＣＮ（国際自然保護連合）が主催し、ＩＣＯＭＯＳ（国際記念物遺跡会議）とのパートナーシップにより開催された。今回はオンライン（令和五年六月十九日、七月四・十三日）と対面（同年九月十日～十六日　サウジアラビア・リヤドのアル・ファイサリハホテル）のハイブリットで行われた（写真一）。六十五カ国九十二の世界遺産の管理に関わる専門家一〇五名が参加した。対面での会議参加者は、地理的な要因から、アラブ、アフリカ、ヨーロッパからが目立ち、北米・中南米、アジア・太平洋地域の参加者は少なく、東アジアから参加者は唯一であった。

今回は「次の五十年に向けた世界遺産の管理」をテーマに行われた。前半のオンライン会合では、サイトマネージャーが各遺産で①世界遺産に登録されたことによるベネフィット、②直面している課題、③世界遺産委員会に求めることを出し合って声明（Statement of the 5th World Heritage Site Managers' Forum）をまとめ、世界遺産委員会で報告された。その概要は、以下の通りである。

世界遺産条約は半世紀にわたり文化と自然地域社会と人々を結びつけ遺産の保護に関して多大な影響を与えた。しかしながら現在、世界遺産は多くの課題を抱えている。その主なものに武力紛争、気候変動の危機、デジタル格差の問題、オーバーツーリズムがあげられる。この状況を踏まえ、サイト・マネージャーは、デジタル技術の普及や持続可能な観光の促進に

取り組んでいく。合わせて今後五十年間の世界遺産の保存管理を確かなものにするため世界遺産委員会に財政・法的な支援を求めていく。

またフォーラムは、世界遺産に関連する最新の動向についての講義を中心に、視察やグループワークなど盛りだくさんの内容で構成される。

講義では「世界遺産の文脈における影響評価のためのガイダンスとツールキット」https://whc.unesco.org/en/guidance-toolkit-impact-assessments/また関連して世界的に推進されている持続可能エネルギ風力発電に特化した「風力発電ガイダンス」https://whc.unesco.org/en/wind-energy、さらに遺産の保存管理の有効性を評価し向上を図る「遺産強化のためのツールキット 2.0（Enhancing Our HeritageToolkit 2.0）」https://whc.unesco.org/en/eoh20。また、世界遺産の資産範囲をオンライン上で示す、世界遺産オンラインマッププラットフォーム（https://whc.unesco.org/en/whgis/）などが紹介された。

視察は、アル・マスマク（宮殿）およびスーク・アルザル、アル・ウラ（ヘグラ考古学遺跡、マダインサーレ）、アル・トライフ（ディルイーヤ）の三箇所を訪れた。

アル・ウラ（写真二）は、リヤドから約七百㎞北西に位置するハーイル市にあるヨルダンの世界遺産ペトラと同じくナバテア人が築いた紀元前一世紀から紀元後一世紀の遺跡で、巨大な砂岩を頂上から掘り込んで作られた墳墓群である。砂岩で壊れやすいため基本的に人の立ち入りはできず、強度がしっかりした石室についてはガイドが同行する場合に限り中に立ち入ることができるようになっている。遺跡のガイドを始めガイダンスセンターなどこの遺産で働く職員百二十名はすべて国の職員。近隣には世界遺産「サウジアラビアのハーイル地方の岩絵」を構成する「ジャバル・ウンム・シンマン」（一万年に及ぶ岩絵遺跡）が所在し、市街地全体を遺産を生かした形で開発し、遺跡観光開発に国を挙げて取り組んでいることが見て取れた。アル・ウラについては、グループ・ワークの題材として、①開発計画および②気候変動の対応策の検討を行った。

アル・トライフ（写真三）はサウジ・アラビアの起源となる十五世紀の都市遺跡である。本遺産の研究施設には多くの研究員が在籍して保全に力を入れている。遺跡は整備・公開されているが、遺跡の中にガイダンスが作られ、遺跡を学びながら散策することができる。入場料は無料。谷を挟んだ反対側の台地には、遺跡と雰囲気を合わせたレストラン・ショップが作られ、長時間滞在できるようになっている。観光客はもちろん現地の人たちも多く訪れ楽しんでいたのが印象的であった。

オンラインで開催された第四回に引き続き二回目の参加であったが、世界各地のサイト・マネージャーと実際に対面して共に学び、体験を共有し、語り合えたことは本当に得難い経験であった。このような機会に恵まれたことを感謝したい。

（岡寺未幾）

写真二　第5回世界遺産サイトマネージャーフォーラム（左　オンライン会合、右　リヤドでの会合）

写真三　アル・ウラ（マダインサーレ）

左　砂岩を削出して作られた石

中　石室内部の状況

右　ガインダンス入口

写真四　アル・トライフ（ディルイーヤ）（左　遺跡全体　右　ガイダンス内部の様子）